

鑑賞のためのメモ

平家物語

【成立】鎌倉時代前期？

【作者】未詳

平安時代末期治承・寿永の内乱(1180～1185)を舞台に、仏教的な無常観を背景として平家一門の栄枯盛衰を描いた軍記物語。平清盛(1118～1181)の栄達と専横から、源氏の挙兵、そして様々な合戦を経て平家一門が滅ぶまでを描く。琵琶法師によって語り継がれたほか、読み物として写本でも伝えられ、様々な異本(内容や巻数の異なるテキスト)が知られる。成立過程や作者については諸説あり、未だ不明な点が多い。

演目1 故郷の花(薩摩の守忠度都落)



平家の敗北が確定し、平氏の武将たちが次々と西国へと落ちる中、平忠度は一人で都内の藤原俊成邸を訪ねた。平家の落ち武者をかくまうとあれば罪に問われると、邸内は騒然とするが、俊成は開門を命じる。

忠度は、匿ってほしかったのではなく、長年の和歌の師匠俊成に自薦の歌集を預けに来たのであった。戦が終わって平和の時代になれば勅撰和歌集の宣旨もまた下るだろう、その際はこの中から一首でも採用してほしいとの思いであった。忠度は詩を口ずさみ邸を後に西国へ旅立った。

戦場にあってもなお歌人としての情熱を保ち続けた忠度に感動した俊成は、忠度の願いを受け入れ、戦の後「千載集」の選の折、忠度の和歌を「詠み人知らず」として採用し、約束を果たしたのであった。

たいらのただのり
* 平 忠度(1144-84)平安後期の武将。忠盛の子清盛の弟。
一の谷の戦で戦死。

演目2 屋島の誉(那須与一の扇の的)

一の谷で敗れた平家軍は、讃岐屋島の内裏に陣を構えるが、ここも義経に攻められ海に逃れた。

海には平氏、陸には源氏。双方勝敗が決まらないまま夕暮れて、戦は一旦収まる。

この時兵士方から小舟が一艘漕ぎ出て、舳先に立てた日の丸の扇を射よと、さし招いた。これを見た義経は、那須与一に射よと命じた。与一は拒みきれず、失敗すれば自軍の恥と死を覚悟して臨んだ。



時は元暦2(1185)年2月18日のことであった。
(今の3月中旬)

(2024.12.10 小林敏二 記)